▼実盛（左）と手塚（右）（昭和30年代）

■田主丸では手塚人形も登場

斎藤実盛の藁人形を作って田を練り歩き、最後に川に流したり焼いたりする虫送りは、九州から中国、近畿、中部東海地方まで広がります。

しかし、田主丸では実盛を討った手塚太郎の人形も登場します。しかも、2体の人形は激しく激突して組み合い、地面に倒れながら相手を組み伏せて勝敗を決するのです。

人形の記録としては、先に紹介した三浦家文書の安政6（1859）年と文久元（1861）年の虫追い役割帳に「実もり」と「手つか」が登場します。

三浦家文書からは、合戦の最後に人形を焼いたことも分かります。文久元年に「諏訪橋東で焼く」、明治3（1870）年に「巨瀬川の橋下で大合戦し実盛は討死、死体を焼くこと」とあります。

同じく先に紹介した『虫追資料』が引用する民俗学者・柳田国男の文には、実盛が燃やされる一方、手塚は村の入口に朽ち果てるまで立てられた、とあります。他に引用する昭和26（1951）年毎日新聞にも同様のことが記されています。一方で、手塚も焼いたとする文献も引用しています。

▼虫追い合戦（中・下写真とも昭和30年代）C,D

■人形の戦い、家族にも伝染

田主丸の虫追いは、喧嘩（けんか）祭りです。多人数で思い切り人形同士をぶつけるため、人形も太い竹柱を芯棒にして簡単に壊れないように作ります。

田主丸町中心部に隣接する怒田（ぬだ）地区の虫追いは、実盛は年配者が、手塚は若者が担当しました。家族の中でも、父子や兄弟で二手に分かれてしまうと、実盛と手塚の魂が乗り移ったように、家でも一切口をききませんでした。人形を相手よりも上手く舞わせようと一生懸命に練習するので、筋肉痛で和式トイレに一度しゃがむと容易に立ち上がれなかったとか。

祭りでは背中にある支えの竹が折れてしまうほどの勢いで2体は激突し、ぶつかり合ったままクルクルと回り、最後は2体が絡まったまま地面に倒れて「勝負あった」となります。昔は、押し倒して上になった方が勝ちとなりました。

本来なら手塚が勝つはずですが、そう簡単にいきません。実盛も悔しいので手塚をひっくり返そうと躍起になります。時には実盛が勝ってしまうことも。こうして結局、何度も合戦が繰り返されました。

現在の虫追い祭りは、勝負を意識していません。それよりも、手塚が目立つように、倒れた人形をできるだけ早く立てることに気を配るそうです。

▼田主丸中央商店街の西入口（昭和30年代）①

■張り子の大馬が暴れ回る

愛知県の祖父江（そぶえ）や島根県の鹿子原（かねこばら）の虫送りでは、馬に乗る実盛の藁人形を作ります。しかし、実盛と別に単独で馬が登場し、しかも、数十人で担ぐ巨大な馬は、田主丸でしか見られません。

田主丸町中心部の5地区に登場する馬は、昭和30年代の頃だと高さ3m・長さ8～9m・幅3m。馬の足として70～80人が担ぎました。ちなみに現在の馬は、高さ2・5m・長さ4・8m・幅1・8m、20数人で担ぎます。

大馬は、田主丸天満宮の境内で作られました。馬の骨組みは竹で組み、表面には蚊帳（かや）を張りました。背中には実盛の芯棒を挿す穴を開けました。この穴は、実盛が大馬に乗って手塚と刀合わせするためです。頭や首は竹組みに新聞紙を張り、耳には竹皮笠を使いました。地区の長老達が作り手でした。

昭和30年代の写真の大馬は、実寸よりもっと大きく見えます。田主丸中央商店街を通る大馬は、2階とほぼ同じ高さに顔があります。そのため、空中の電線に引っ掛からないよう長い竿で電線を押し上げる役がいました。大馬の担ぎ手は馬の周りだけでなく、馬の中にもいます。現在も中に入りますが、当時の馬はより長く幅広でしたから、より多くの人数が中に入ったと思われます。

大馬は、なかなかの酒好きでした。酒屋や料理屋の前では酒が振る舞われるまでは動かず、出し渋れば暴れて店の軒（のき）を壊しておいて「馬だから仕方ない」と知らん顔。逆に、一斗樽でも貰えたら、店の人を馬に乗せてあげました。

虫追いの演技では、人形が地面に倒れ手塚が上になって勝ちそうになると、それを邪魔しに実盛の大馬が突進して両者の間に分け入ります。昔は、喧嘩腰で揉み合い続ける舞い手達を大馬で蹴散らす、という運営上の意図もあったそうです。

大馬が人形の上を踏み進むこともあるので、人形は踏まれても壊れないように、芯棒になる竹柱を藁で包んだ上にさらにトタン板を巻き、手足もトタン板で防護しました。だから当時の人形は重くて大変だったそうです。

■大馬は、いたりいなかったり

大馬が登場したのを確認できる最初の事例は、明治43（1910）年10月の田主丸町の中心部5地区（栄町二丁目・栄町三丁目・港町・村島・馬場）の虫追いです。

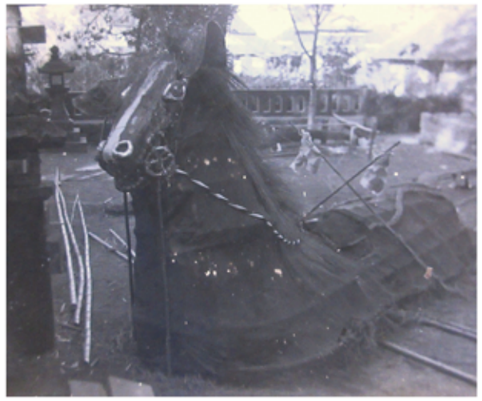
それ以前、蔵八村（蔵町・松原地区）の安政6年および文久元年の虫追い役割帳に馬は登場しません。久留米藩の郡奉行だった木村三郎が残した『廻村書留』の嘉永2（1849）年の虫追い記載部分にも馬は登場しません。

実は、田主丸でも地区によって、馬がいたりいなかったりだったようです。町中心部5地区に隣接する豊城地域（怒田・中舎館「ちゅうじゃかん」・口高・栄町四丁目の4地区）には大馬はいなかったそうです。確かに、怒田地区の昭和10（1935）年の虫追い人名帳に馬は登場しません。

『虫追資料』が引用する文献には、柳田国男の文を筆頭に、馬に触れない文献が複数あって違和感があります。しかし、これも場所によって馬の有無があることを理解すれば納得できます。

馬のいない豊城地域では、馬に踏まれる心配が無いので、人形をトタン板では巻かず、竹とカズラで作りました。軽いのでとても綺麗に踊れました。なお、豊城地域では、実盛・手塚人形の対（つい）を2組も3組も作って踊りを舞うことがありました。舞い手が多いと複数の組が作られて、進行する時は前の人形が上がれば後ろは下げるようなメリハリをつけて踊ったそうです。

それでは、田主丸町の中心部5地区だけが大馬を出したのか、というと、他の地区にも馬がいた痕跡が残っています。

明石田（あかしだ）地区の八幡神社で太平洋戦争以前に撮影された虫追い写真が残されていますが、そこに大馬が写っているのです。また、昭和47（1972）年に西郷地区の歴史を地元でまとめた『遺稿集』には、壮年男子30人ほどで担ぎ、目が電池で光る馬を作った、と書かれています。

▼明石田地区の大馬（昭和10年代）②